皮革の比較史 5

アジアの革づくり人たち

西村祐子　駒澤大学教授

＊本研究はJSPS科研費JP16K04098の助成を受けたものです。

1　インドネシアのハルヨノさん

インドネシアの西ジャワにあるボゴールは、一八世紀後半から一九世紀にかけて、オランダ植民地下で急速に発展した町だ。いまは田舎町なのだがインドネシアでも有数の皮革の産地だという。インドネシア皮なめし協会は本部をここに置いていると言われ、ぜひここを訪れるように勧められた。

インドネシア革なめし協会の会長のハルヨノさんは、客家という中国南部を起源にもつ華僑の末裔だ。彼は工場をこの地で操業している。ホゴールに協会本部があるのは、なめし業者が周辺に多く、ジャカルタより便利だからだという。

ハルヨノさんは、なめし協会をぜひとも外に向かって開けた組織にしたいと望んでいた。

閉鎖的だった皮なめし業界を外に向けて発信するため、ホームページをつくり、なめし協会のニュースや訪問してくれた海外のゲストの話などを載せた。インドネシア国内のなめし業者の地域別リストを載せ、コンタクトしやすいように電話や住所などだけでなく、メールアドレスまで書き込んだ。

この地で皮革業というと、まず思い浮かべるのが「客家（はっか）」という華僑集団だということは、ハルヨノさん自身から聞かされた。

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd　1　2016/11/25　10:40:17

彼はインドネシア人でインドネシア風の名前を名乗ってはいるのだが、華僑で、客家だ。インドネシアに向かう前、英国の皮革専門家のマイクレッドウッドさんに、「インドネシアもマレーシアも皮革関係はみんな中国系がやっています。中国系以外の皮革業者に会うことはまずめずらしいでしょう」と言われたことを思い出した。

●客家とは?

華僑というのは中国大陸でも華南地方（福建省、広東省、海南省、広西地湾族自治区などの中国南部）から移住してきた集団で、なかでも客家は皮なめしや靴産業と結びつきが深い。

「客家はアジアでは皮なめしや靴づくりで知られていて、私もこの業種に抵抗感はありませんでした。私が皮なめし工場をはじめたのは父が友人たちと経営していた大きな皮革製品の店を手伝うことになったからです。できたものを仕入れるより、自前でつくったほうが安くすむ。だからなめしをすることにしたんです」

協会から紹介されて皮なめし工場を五件まわってみたが、いずれも客家か、マレー系と客家による共同事業だった。タイやマレーシア、インドネシアでも皮革の店や靴工場経営者などは客家が多い。そして彼らの特徴はグローバルなことだ。国籍はあまり関係なく、自集団のネットワークを大事にする。

メールで情報交換をすると、ハルヨノさんはいつも違う国から返事をくれた。出張先は香港、タイ、台湾、マレーシア、シンガポールなどだ。

おそらく毎週どこかを飛び回っているのだろう。同胞との協働ビジネスやネットワークがあるのだ。「ビジネスをするならば、私たちは自分のコミュニティの人間をパートナーにします。信頼が置けるからです」と話していた。

皮革業だけにとどまらず、一族のビジネスは業種がいくつにもわかれているのだが、銀行は皮革業をメインビジネスとみなす。だから皮革工場を閉めるわけにはいかないという。

「皮革ビジネスが私たちの看板なので、銀行はそ

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd　2　2016/11/25　10:40:17

れを担保に、信用度を計って融資するのです」

2　拡大していく華僑のネットワーク

アジアからの移住者集団はいずれも、父、息子、父方の伯父、といった、父系で繋がる親族による共同経営ビジネスを代々続けている。結婚によって繋がった姻族の男性たちを含めて営まれることも多い。詳しく述べるとこういうことだ。

華僑は、二代目か三代目でビジネスが分岐し、息子たちがそれぞれ独立したビジネスをはじめる。そのとき親のビジネスとの信用供与の関係もはじまる。従業員のリクルートや経営といった人事面から、融資などに関して、数世代にわたって相互の干渉が続いていく。

さらに結婚で別の姻族と結ばれ、ネットワークは拡大していく。結婚はすなわちビジネス同盟でもある。

ちなみに、何代にもわたって投資し続けられてきたこのネットワークを活用したビジネスは、一からつくるより楽である。巨大な資本がなくともコミュニティ全体の資本に依存して、そこで融通しあったり、人員を確保したりするほうがリスクが少ない。また、お互いに持ちつ持たれつであれば、ニッチなビジネスに特化することができるのだ。

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd　3　2016/11/25　10:40:17

インド系の移民でもこうしたシステムは働いていて、同じカーストの結束を強めていくことになるのだが、華僑であればカーストでなく、出身地をベースにした民族集団の結束が強まる。華僑のネットワークは移住先とともに広がり、ペナンやマラッカなど、マレーシアにとどまらず、東南アジアからインドを経て英国、米国、オーストラリアなどにまで広がっている。

華僑の結束の固さは、父系親族を中心とした非営利組織としてお寺や廟（コンシー）などをつくり、そこで定期的に会合を開いたり祭事をおこなったりすることにもあらわれている。地元のグループは会合を開いたり祭事をおこなったりする場所としても、寺院や廟を活用する。ハルヨノさんに勧められて訪れたマレーシアのペナンでは、美しい廟がいくつも建っている。そして廟を共有する父系氏族の活動ぶりが一族の隆盛を示す指標でもある。

地元でも有名な、美しい廟のひとつを訪ねてみた。金や銀をふんだんに使ったみるからにまばゆく豪華な廟で、観光客がひっきりなしに訪れている。

入場チケットを買おうと入口の隣にある事務所にはいった。受付の若い女性に「廟の歴史について知りたいのですが」と質問すると、彼女は椅子に座っていた小柄なおじいさんを指さした。おじいさんに同じ質問をすると、目を輝かせ、身を乗り出して「よくぞ聞いてくれた」と喜んで彼の対面の椅子を示す。

ローレンスと名乗るおじさんは、その廟に連なる家系の出身で、非営利組織となっている廟の運営理事をつとめてもいた。銀行を退職してからボランティアで説明係を引き受けているらしい。彼の先祖の客家は一六世紀に福建省からフィリピンに移住し、一七～一八世紀には台湾やインドネシアにも移住し、マレーシアにもやってきた。かなりダイナミックに世界を股にかけている。

ローレンスおじさんは言う。「日本に住んでいる客家もいます。日本に漢字や稲作文化を伝えたのは華南からやってきた客家の子孫だから、私たちは共

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd　4　2016/11/25　10:40:17

通の文化をもっているんです」。

客家は漢民族の一派だが客家語という方言をもち、独自の民族的アイデンティティを形成している。ちなみに中国の主席だった鄧小平や、台湾総統だった李登輝、シンガポールの首相だったリー・クアンユーなども客家出身である。故ダイアナ妃の靴を手掛けていた靴デザイナーのジミー・チョウもペナン出身の客家だ。

●客家の悲劇

だが、ローレンスさんは、客家には悲劇がつきまとっているとも言う。

もともと中国北部に住んでいた漢民族の一派だった彼らは、北方騎馬民族に押されて南下し、華南の沿岸地方に住みついたという。生活を支えるため、沿岸諸国との交易に携わり始めた。だが一四世紀～一七世紀に中国大陸を支配した明は、海外進出を禁止する海禁政策を宣言した。

客家はこのため交易を阻まれ、海外渡航や移住も禁じられ、生計を立てる術を失った。禁を犯して東南アジア諸国に定住しなければとても生きていけなかった。だがそうすると帰ることはできなくなる。帰れば投獄や処刑という刑罰が待っていた。

十六世紀、明に代わって政権をとった清王朝も同じく海禁政策をとり、同じくその禁を犯せば処刑という厳罰が科されたのだが、そこでフィリピンに渡航していた客家を悲劇が襲った。

当時フィリピンを征服したスペインは、貿易の利権を独占するため、客家を強制的に清に送りかえしたのだ。送還された数千人の客家たちは、故国で首をはねられた。

その後、スペイン人は彼らを放逐したことを後悔し始める。客家がいなくなってモノや金の流通機構が動かなくなってしまったからだ。

そこで方針転換し、スペイン植民地政府は客家を再び受け入れることにした。フィリピンに定住した華僑には、支配者層のスペイン人と通婚し、名前をスペイン風にした人びともいた。

ローレンスさんはこの話をしながら感情の高ぶり

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd 5 2016/11/25 10:40:17

を抑えられなかったらしく目線を落とし声をつまらせた。集団の歴史を語ることで先人たちの受難の歴史を反芻し、その悲しみを共有しているようだった。

3　安心できない生活と、そのためのグローバルな対策

客家にとってのさらなる悲劇は、清朝末期の一九世紀後半に中国大陸内で起きた。客家出身の洪秀全を中心として当時の政権に批判的な人びとが、太平天国の乱という十四年あまりにわたる大規模な反政府動乱を起こしたのだ。この結果二〇〇〇万もの人びとが虐殺された。

多くの客家たちは故国を捨て、海外に逃れることを選んだ。たとえ親族の一部が中国に残っていても、外地に親戚がいればいざというときに逃げ出すことができた。親族のなかの誰かを海外に送りだしておくのは、一族全体の安全策でもあったのだ。

「私たち客家は第二次大戦中は国民党を支持していました。戦後もしばらくは台湾に逃れた国民党を支持していました。でも、大陸で共産党が政権をとったので、国民党を支持していた私たちは、中国に入れなくなってしまいました。その後共産党が方針を変え、大陸に里帰りができるようになりましたが、次第に台湾にも大陸から外省人が移住してくるようになり、窮屈になりました。彼らは台湾の従来の文化をないがしろにして、大陸の文化を押しつけようとする。だから私たちは警戒しています」

ローレンスさんはペナンでマレーシア人として暮らしていても、必ずしも安全だとはいえないと考えている。

ペナンは客家だけでなく、広東人、福建人などの華僑も多い。加えて地理的に近い南インドからの移住者たちもいて、南インドのイスラム教徒や商業カーストのチェッティヤールなどが居住してきた。

彼らは総じて目に見える対立なく共存してきた。しかし、と不安気に話す。

「これまでインド系のイスラム教徒が暴力沙汰を起こすことはほとんどなかったし、私たちも政治的

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd　6　2016/11/25　10:40:17

な発言はしてこなかったのです。ところが昨今南インドではなく、北インドからのイスラム教徒もはいってくるようになって、アルカイーダに通じているテロリストやらもはいってきた。それに同調する狂信的なイスラム教徒主義が見られるようになってきた。そうなると私たちもどのようにスケープゴートにさせられるかわからない。怖いことだと思っています」

西欧列強の植民地支配が活発になった一七世紀〜一八世紀にかけて、広東人や福建人も、アジア諸国を股にかけて活動していた。彼らは大工や金貸し業などで生計を立てる術をすでに獲得していたが、客家は彼らより専業化が遅れていた。そこで目をつけたのは、皮革業だったということらしい。[1] インドネシアやマレーシアだけでなく、タイでも製靴業はほとんどが客家の経営によるとされているくらい客家は皮革業で有名だ。

植民地を支配するにはそれまでにないような大規模な専門化された軍隊が必要であり、兵隊がいるところ、皮革工場があるとすらいわれた。そして近代産業にも皮革は重要な位置を占めていた。あらゆる工場の部品には、皮革が必要だったのだ。

4 カルカッタの客家、チューさんのサクセスストーリー[2]

カルカッタ近郊のタングラ出身のダン・チューさんは五〇代で、現在はアメリカに在住する、成功した銀行家だ。皮なめし工場がある環境で育った。彼はウォールストリートジャーナルのインタビューに答えて半生を振り返っている。

父は地元の客家小学校の校長だったが、パートタイムの保険外交員も兼ねていた。家業の皮なめし工場は母が経営していた。チューさんも学校の授業を終えるとすぐになめし工場にいって、重い皮をかついで仕事を手伝った。家の裏手にはゴミ捨て場もあり、おせじにもきれいな場所に住んでいるとはいえなかった。スクーターで四十分ほどいけばカルカッタの繁華街に出られるのだが、そんな華やかな世界とは無縁の子供時代をおくった。

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd 7 2016/11/25 10:40:17

教育熱心な両親の判断で、彼は英語で授業をする私立学校に転校することになる。そしてそこで米国人の宣教師と出会い、大きなチャンスを手にする。宣教師は彼が利発であるのに目をとめ、アメリカの家に寄宿させて米国の学校に進むことを提案してくれた。

アメリカの大学に進学し、コンピュータと会計学等を学び、銀行に職を得た。そしてアメリカの永住権を得、カルカッタから家族全員を呼び寄せて新しい生活を築いた。絵にかいたようなサクセスストーリー。

チューさんはインドでの生活を振り返り、やはり自分たちは二等市民として扱われていたのだと思った。

「我々客家は、母国の中国にいるときから日に十八時間も働いていました。それでも相変わらず貧しいままでした。他のアジアの国に移っても、やはり客家は寝食を忘れて、一生懸命男女の別なく働かざるをえませんでした」

大きな戦争は皮革ビジネスを飛躍的に成長させ、客家たちは大きな利益を得た。そのとき集団として彼らが投資したのは教育だった。自集団の子弟のために英語で授業をおこなう私立学校を次々と建て、平時から怠りなくいつでも子弟が海外に飛び立てるように準備をしていた。それが成功の鍵であることを、みな自覚していた。

これはインドの客家に限ったことではないらしい。インドネシアの皮革業に携わる客家たちにインタビューした折も、彼らの教育や研究の熱心さには驚かされることが多かった。

工場のオーナーたちは、いずれも皮革関係の専門技術や知識を得るために破格の投資をしていた。イ

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd 8 2016/11/25 10:40:18

ンドネシア国内での専門教育だけではあきたらず、欧米の有名な専門学校や大学に子弟を何年も留学させ、必ず資格をとってから帰国させるのだった。

5　タミルナードゥ州・アーンブールを訪ねて

現代のインドで革のメッカといえば、カルカッタでもデリーでもボンベイでもない。南インドのタミルナードゥ州のチェンナイやアーンブールだ。「アーンブールにいく」と言うと、人びとは「靴でも買いにゆくのか？」と尋ねるくらいだ。さしずめここはインドの「姫路」のようなところだ。ちなみに、現在九〇年以上の歴史がある全インド皮革製造・販売協会（ＡＩＳＨＴＭＡ）はチェンナイに置かれていて、中央皮革研究所（ＣＬＲＩ）もチェンナイにあるくらい、南インドと皮革産業は結びつきが強い。

そのチェンナイから西に一八六キロあまり、アーコット郡に位置しているのが皮革の町、アーンブールだ。ＡＩＳＨＴＭＡのおじいさんに勧められて、アーンブールを訪れることにした。ヒンドゥー教徒が多い南インドでも、イスラム教徒がマジョリティを占める地域がある。そのひとつが、アーンブールが位置するヴェッロール郡だ。五万六〇〇〇人ほどの人口で、ヒンドゥー教徒が四五・八九％、イスラム教徒は五二・六五％、キリスト教徒が〇・七七％。ここではイスラム教徒が多数派だ。

イスラム教徒は、ヒンドゥーが穢れているとして触れなかった牛や馬の屍の皮をはいで革にすることに、文化伝統としてためらいを覚えない。皮革にかけてはヒンドゥーよりイスラム教徒のほうが熟達している。しかし、英国の植民地化とともに、軍需品として皮革の重要性が高まったとき、驚くべきことに、その成功を横目で見ていた南インドのヒンドゥー・バラモンがなめし業と製靴業に進出してきたのだ。

ＡＩＳＨＴＭＡで聞くと、この協会の理事長も、イスラム教徒とバラモンが交互につとめるようになっている仕組みで、南インドでもヒンドゥー教徒の

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd　9　2016/11/25　10:40:18

皮革業経営者は一割程度いるという。特に気になったのがバラモンが経営者ということだ。バラモンがヒンドゥー教で穢れとされている皮革を扱うのは問題ないのかと疑い深い調子で尋ねると、「いや、彼らは工場主で、直接革をつくるわけじゃないですから」とイスラム教徒のおじいさんが涼しい顔で答える。要するに儲かればいいということか。

6　皮革産業に見る宗教とジェンダー

全インドの皮革生産量の六〇％がタミルナードゥ州で産出され、輸出皮革の四〇％を占めているのだが、タミルナードゥ州政府の施策で、現在一〇〇％のなめし工場が、排水処理施設で汚水を処理している。そうでなければ工場を経営することは許されないのだ。人びとはアーンブールに大きな排水浄化システムをつくり、そこを集中的にコンピュータ管理して、周囲に大中小のなめし工場を配備することにした。

排水の浄化システムを自前でもてない中小規模のなめし工場を支援するために、産業振興をめざすタミルナードゥ州が建設資金を支援してこの設備は作り上げられたのだった。

世界レベルで要求される環境基準を満たしていなければ、海外の皮革会社のバイヤーたちが革を買ってくれない。労働条件がきちんと守られているかどうか、欧米のバイヤーたちは年に一度は必ず視察に訪れる。

そしてこの施策は、所得が低い地域に女性も働ける職場を多くつくりだし、経済的に活性化するために有効な施策でもあった。

工場を訪れるとちょうど昼時で、製靴工場を見ていると、実家から子供たちや妹たち、妻たちがステンレス容器にはいったお弁当をさげて工場の窓の下に置いていた。従業員たちが自分のお弁当ボックスの特徴を覚えていて、それを工場の食堂にもっていって食べるというシステムらしい。

あいにくとそのときはラマダン（イスラム教徒の断食月）で、工場の管理職の男性たちは食事ができ

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd　10　2016/11/25　10:40:18

ないということだった。だが、一緒に働いている事務の女性たちはヒンドゥーなのか、あるいはラマダンを守らないイスラム教徒の女性たちなのか、平気でお弁当を広げて食べている。なんとものどかな田舎の風景が、近代工場のすぐ外に広がっていた。

靴工場をまわると、イスラム教徒の帽子をかぶった若い男性と髪を隠した女性、そしてヒンドゥーらしきサリー姿の女性たちが同じフロアで働いているのが見えた。話を聞いてみると、女性たちは明るい表情で、とても職場には満足しているとのことだった。

インドの皮革産業は輸出の稼ぎ頭で、確実に仕事の数を増やしてくれる。なめしの段階からはじまって、たくさんの人手が必要だからだ。輸出の花形なので、このセクターの企業家は州政府に対しても大きな影響力をもっている。そしてその九〇％はイスラム教徒で、彼らの伝統的なビジネスとして、中核となる有力なファミリーが代々続けてきたから、影響力はますます強くなる。

皮革業の管理職や技術専門職にはイスラム教徒の男性がほとんどで、女性はイスラム教徒であれヒンドゥーであれ、事務職どまりか未熟練労働者だ。生産ラインにまわされ、給料は低く抑えられている。彼らの下に、数多くの女性たちが内職として靴づくりを請け負っている。

タミルナードゥ州の皮革産業を調査した研究者のヴァイテーギさんによると、皮革産業は宗教（イスラム教徒優位）とジェンダー（男性優位）が画然とわかれて成り立っている職種だという（Vaithegi 2005）。経営者と労働者の区別がはっきりしていて、労働争議もない。アーンブールをはじめとするヴェッロール郡の皮革産業ベルトでは、労働者が集結せずに拡散している。工場が並ぶ地帯が拡散しているので、一緒に組合をつくって組織化することが難しい。

女性も工場や家庭から労働力を提供していて、工場で働く人びとも拡散しているのだが、経営者は工場でも女性を雇うことを好むので、女性が仕事にあ

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd　11　2016/11/25　10:40:18

りつくチャンスは高い。女性たちのほうが手が器用で靴づくりの細かい作業に向いているのと、同じ職種であれば男性より低賃金で雇えて、組合などの労働運動によって組織化されにくいからだという。アーンブールだけでも一万八〇〇〇人～二万人の人びとがなめし工場や靴工場で働いているが、そのうちの一万六〇〇〇人が女性なのだという。だが、その多くは内職組だ。

近代的ななめし工場や製靴工場で働くことは、収入はそれほど高くはないけれど、経済的な安定を図ることには役立っているのだろう。仕事を得て家計を安定させることを優先するならば、女性にとっては家にいて少し稼ぎがあり、夫婦ともに皮革産業で働けるというのはよいことなのだろう。

皮なめし工場がバラモンに経営されている例があるのにも驚いたが、製靴工場での工場労働者たちが普通は対立しているとされるイスラム教徒とヒンドゥー教徒の、しかも男性と女性が同じ職場で抵抗なく働いているのはかなり異例だと思った。

「近代的な工場だったら別に靴工場だってかまわない」というヒンドゥー教徒の若い女性たちには浄・不浄論よりも、給料がもらえて清潔でちゃんとした職場で働けることが重要らしかった。

●社会的地位向上の過渡期にある皮革関連業

インドのほかの村を調査していると、仕事がないことが一番の問題で、どんな収入の道が考えられるだろうかといつも頭を悩ませることになってしまう。仕事をつくりだすのは本当に難しいのだ。だが、ここでは、考えなくても、一応仕事はある。きつくても仕事を与えられる皮革産業が途上国の経済を助けていることは確かだ。

インドでは、皮革や靴部門での専門化がようやく

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd 12 2016/11/25 10:40:18

なしとげられ、社会的地位の向上が、いままさにはじまったのだと思う。

化学教育を受けてなめし技術者になったという、前不可触カースト出身の男性が出していたインターネットの求婚広告に出合ったことがある。なめし技術者というステイタスを主張できるようになったのだと感慨にふけったものだ。前不可触カーストの女性のなかにも求婚広告のなかに自分の学歴と資格を書き込む女性も出てきている。私が見るのはオンラインで地域色がはっきりしたカーストごとの求婚広告を載せるサイトで、しかも英語で書かれているものだ。つまり、それなりの教育がある層が使っているサイトだが、そこにもかつて低カーストとされた集団がつくっているサイトがどんどん出てきている。

皮革の仕事は大変だが、働いている女性たちにはまず、少しでも収入を得てもらいたい。そしてなんとか子供たちを育てて、飛躍のチャンスを掴んでほしい。そんなことを願いつつ、アーンブールをあとにしたことだった。

（1）Chee-Beng Tan, Routledge Handbook of the Chinese Diaspora, Routledge, 2013, J.Leo, Global Hakka: Hakka Identity in the Remaking, Brill, 2015.

（2）G. Chon, 'A Passage from India,' Wall Street Journal, Updated April 9, 2011. http://www.wsj.com/articles/SB10001424052748704843404576251103873336010 以下の記事も参照した。

'Calcutta's Chinatown facing extinction over new rule', The Observer, London, Sat, Jul 31, 2004, reprinted in http//www.taipeitimes.com/News/world/archives/2004/07/31/2003181147

（3）B. Vaithegi, 'Decentralised Production System and Labour Market Flexibility:

（4）A Study of Leather Footwear Industry in South India, , Paper to be presented at International Conference in Memory of Guy Mhone: On Sustainable Employment Generation in Developing Countries; Current Constraints and Alternative Strategies, , which is to be held from 25-27th of January, 2007, at Nairobi, Kenya.

（つづく）

にしむら ゆうこ

皮革の比較史⑤_西村祐子氏.indd 13 2016/11/25 10:40:18